

アークナイツ &lt;t;明日  
方舟&gt;t;

希依那

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

正史とオリジナル（完全オリジナルではなくある程度の原作要素）

鉱石病（オリパシー）によって虐げられ人々がいた。

天災により命、家族、家を失った人々がいた。

魔族と呼ばれる人々がいた。

食い物にされるされる騎士たちがいた。

自らの運命に抗う人々がいた。

全ての救いを求め自らを壊し続けてきた人がいた。

そんな人々が所属する組織があつた…。

# 目次

正史

アークナイトップロローグ<正史>

1

オリジナル有

アークナイトップロローグ<オリジナル

有>

22

誰ガ為ニ舟ハ往ク

46



## 正史

## アークナイツプロローグ&lt;正史&gt;

ああ、君か。

君にこうして会うのは久方ぶりだ。

ここ最近、君はずいぶん境界をさまよっていたようだな。

そして己が何者なのか、君はもう忘れてしまっているのだろう。しかし今は名前さえ思い出せれば十分だ。

—さあ、ここに長く留まっては行けない。

君は元より私の客人ではない。ここには存在してはならないのだ。

彼女には君が必要だ。

12月23日

この日が君にとって何を意味するのか、今は思い出せないだろう。

しかしそのままでは、君自身を危うくしてしまう。

.....。

だが—

君は思い出さねばならないのだ。

謎の声

「意識レベル。」

謎の声

「体外循環開始。心肺停止液の注入を完了。」

謎の声

「体温低下。ヘキサメタゾン20ccを静脈に注射。」

謎の声

「紺子を！」

謎の声

「状態安定。切除を開始する。心室細動に注意。」

謎の声「ごめんなさい。また苦しめることになってしまった。」

「。」

「ドクター。」

「手を。」

??????????

「私を」  
 「私の手を握って!!」

—誰かの手の体温が伝わってくる—

「緊急」  
 「救った」

—暗転—

「ドクター、ドクター！」  
 「医療オペレーター、ドクターは大丈夫

「さつき、さつきドクターは私の手  
 なんですか？」

「どうして目を覚ましてくれな  
 いか、どうしたら」

医療オペレーター

「アーミヤさん！そんなに焦らないで、どうか冷静に！」

「アーミヤ「あ、ご、ごめんなさい。」

医療オペレーター

「もう！ドクターのことになると、まるで人が変わってしまいうんですから。」

医療オペレーター

「でもアーミヤさん、ドクターがもしこのままなら、どうするつもりですか？」

アーミヤ

「心の準備は出来ています。もしそうなったとしても決めたとおりにするだけです。」

医療オペレーター

「わかりました。ではその通りに」

アーミヤ

「はい、よろしくおねがいします。」

アーミヤ

「じゃあドクター。」

医療オペレーター



「でもひとまずは安心です容態は落ち着いていますから。」

医療オペレーター

「念のため、もう一度再検査してみます。お任せ下さい。」

アーミヤ

「はい、お願いします！」

医療オペレーター

「はい。呼吸はまだ微弱ですが、血圧は正常範囲内身体機能は問題ないはずですよ。あとは意識が戻るかどうか。」

アーミヤ

「」

医療オペレーター

「。あつ、目を覚ましたか？」

アーミヤさん、成功です、

ドクターが目覚めました！」

アーミヤ

「ドクター」

「良かった本当に良かったドクター。」

医療オペレーター

「あつ！まだ動いちゃ。」

—ズキツ—

医療オペレーター

「安静にしてください。まだ体が安定した訳ではありません。」

アーミヤ

「ドクター」

ドクター

「君たちは一体？」

アーミヤ

「えっ—ドクター—私は。」

「。」

「私はアーミヤといいます。」

あなたを助けに来ました。」

ドクター

「私は」

アーミヤ

「あなたは。」

「私たち口ドスの一員です。」

「私たちの仲間です。」

「Dr. 希依那。」

あなたは私にとって

一番大切な仲間なんです

思い出せませんか？」

——その話を信じろと？

アミーヤ

「。わかつています。」

いきなりこんなことを言われても信じられないですよね。

今すぐに思い出して欲しいとも、

今すぐに信じて欲しいとも言いません。」

アミーヤ

「とにかく私にとってドクターは一番大切な人なんです。何があっても、それだけは変わりません。だから、私に、少しだけ時間をください。少しだけでいいですから。」

ドクター

「。。」

「医療オペレーター」

「ドクターは、本当に記憶喪失に？」

「アーミヤ」

「。」

「大丈夫です。」

「きつと時間が解決してくれます。」

「ドクター」

「ここは一体」

「アーミヤ」

「ここは」

「ドンッ」

「アーミヤ」

「えっ!?何が」

「完全武装の男」

「アーミヤさん、マズイです!この施設内に侵入してきたヤツらがいます!」

「完全武装の男」

「しかも、あの装備は……ウルサスの兵士のものではありません！」  
くガコン

レユニオンメンバー

完全武装の男

「何をするつもりだ！」

くダンッ

完全武装の男

「敵襲です！アーミヤさん、敵は重火器を持っています。」

クロスボウが飛来する

医療オペレーター

「うわわわっ！」

アーミヤ

「皆さん、気をつけて！壁の陰に隠れてドクターを守って！」

「この装備はまさか……」

レユニオンメンバーメント!? どうして……。

前衛オペレーター……

戦闘の準備をしてください！」

前衛オペレーター

「了解！」

＼ドカーン／

前衛オペレーター

「クソツ、こいつらの狙いはドクターか！」

アーミヤ

「いえ」

ドクターの存在は誰も知らないはずで

急ぎケルシー先生に通信を！」

前衛オペレーター

「ダメです、通信機が正常に動作しません！」

アーミヤ

「どうやらジャミングされているようです。」

まさか、ウルサス政府が私たちの動きに気づいたんでしょか？」

前衛オペレーター

「どうしますか？」

アーミヤ

「今回の作戦指揮はケルシー先生にお任せしています。でも通信できないとなると。」

D.r. 希依那。

「私たちの指揮をお願いします！」

医療オペレーター

「そ、そんなの危険すぎます。まだ意識が戻ったばかりなのに。」

アーミヤ

「試してみたいんです。」

「確かに記憶は失われています。でもドクターはかつて私たちと。」

「私たちと一緒に戦った仲間なんですから！」

「回想」

???

「こんなに沢山のこと、私に教えていただいて、ありがとうございます。」

「回想終了」

アーミヤ

「。」

一緒にたくさん・たくさんを経験したんです。私には分かります。ドクターならきつと勝利をもたらしてくれると。」

—回想—

???

「あなたならきつと勝利をもたらしてくれる。」

—回想終了—

アミーヤ

「突然こんなお願いをするのは、私もどうかと思います。でも、でも……お願いします。」

あなたの力を貸してください。

私もサポートしますから！」

ドクター

「身を守る種に戦うだけ、そうだろうか？」

アミーヤ

「はい。私もドクターをまたこんな戦いに巻き込むのは不本意ですが……でも今の私たちに、Dr. 希依那の知恵が必要なんです。」

戦っていれば、指揮の感覚もきつと取り戻せると思います。」



「ドクター自身もまだ信じられないかもしれませんが。私は信じます。きつとできるって、私は信じています。」

ロドスの——指揮を！」

—— オペレーション???

「黙っている。」

「アツプルパイ!!」

アーミヤ

「レユニオンムーブメントは単なる無秩序な感染者集団だったのですが、でも今は、明確な意志の元に集団で行動している様に見えます。」

では、次の敵を迎撃する準備を。」

「切り捨てるっ!!」

「（、↓、）（、↓、）（ペシペシ）」

アーミヤ「私が怖いですか？」

「雷鳴よ・轟け！」

「着いてきて！」

前衛オペレーター

「これで最後の一人だ！」

レユニオン構成員

「うわあ！」

前衛オペレーター

「目標は排除しました。」

敵小隊の撤退を確認！

Dr. 希依那の指揮は、アーミヤさんが言った通り素晴らしいものでした。」

アーミヤ

「はい、あっさり勝てましたね。」

ドクターが経験してきたものはこの程度ではありませんから。」

レユニオン構成員

「くっ・どうして・ウルサス人でもない連中が邪魔を・」

お前らなんか・

我々の仕事の邪魔はさせん！」

???

「そこまでだ！」

前衛オペレーター

「ド、ドーベルマン教官！」

ドーベルマン

「何をボヤツとしている！もう少しで蜂の巣になるところだったぞ！」

前衛オペレーター

「も、申し訳ございません！」

ドーベルマン

「急げ！隊列を立て直すぞ！」

前衛オペレーター

「はっ！」

アーミヤ

「ドーベルマンさん！来てくれたんですね！」

ドーベルマン

「アーミヤ、緊急事態だ。私の小隊もレユニオンからの攻撃を受けた。

そちらも同様だろうと推察し、急行してきたというわけだ。」

アーミヤ

「レユニオンは、どうして私たちを襲撃したのでしょうか？」

ドーベルマン

「感染者のための組織・盲目的な思想を持つ危険な集団だとは思っていたが――

――まさか武力蜂起するとはな。しかもウルサスの都市を選ぶなど正気とは思えん。この状況は、さらなる混乱を招くことになるだろう。

アーミヤ「これ以上巻き込まれる前に、すぐにチエルノボークを離れるぞ。」

アーミヤ

「わかりました。ドクターの救出にも成功しましたし、計画通り撤退しましょう。」

ドーベルマン

「――この方が・D r・希依那か？」

アーミヤ

「はい、そうです。」

ドーベルマン

「D r・希依那、この私のことは知らないかもしれませんが、アーミヤのことはわかるだろう。安全のために――」

アーミヤ

「あ、あの。」

ドーベルマンさん、今のドクターは状況が芳しくなくて、簡単に言うとうと、ドクターは記憶喪失なんです。」

ドーベルマン

「なに？記憶喪失だと？」

「困ったな。そんな状況で指揮権をドクターに委ねようとしているのか。」

アーミヤ

「ドクターは指揮官としての能力は失っていません。」

少なくとも、先程の戦いでそれは確認できました。」

ドーベルマン

「わかった。私は簡単にこの眼で見えていないものは信じることはできません。」

アーミヤ、お前を信じよう。」

アーミヤ

「ありがとうございます。」

ドーベルマン

「Dr. 希依那、私は行動隊Eーの隊長、ドーベルマンだ。」

お前をこのウルサスの都市―チエルノボーグから我々のロドスまで送り届けてやる。

ここはチエルノボーグの中枢エリアに位置している。西側から即時撤退するのが得策だろう。」

アーミヤ

「ですが、当初のプランでは西の合流地点に私とドーベルマンさんの部隊がいちど集結し、撤退信号を出して待つ。」

そういう計画になっていました。」

ドーベルマン

「計画通りに事が運べば良かったのだから。」

とはいえ、Dr. 希依那をあの手チエルノボーグの棺桶から救出するのは今日が最後のチャンスだったからな。仕方なからう。

だが、嫌な予感がするな。」

医療オペレーター

「ア、アーミヤさん！」

アーミヤ

「どうしましたか？」

医療オペレーター

「ロドスから通信が入りました！」

アーミヤ

「つながったんですね！まさか、ケルシー先。」

「???<誠に残念ながら、違います。>

アーミヤ

「PRTS。」

PRTS。

「<アーミヤ様、ご報告いたします。ニューラルコネクタへの緊急接続要請が予期せぬ形で実行されました。」

現在、ロドスも通信妨害を受けており、接続が可能なのはニューラルコネクタのみとなっておりま。

そのため、電波を使用した通信では、まだロドスに帰還していないケルシー様にコネクトすることはできません。

何れともあれ、アーミヤ様の安全が確認できましたので、現時点での私のミッションは完了となります。>

ドーベルマン

「いっ。」

「こんな時に脳天気なことを。」

P R T S

<ニユーラルコネクタによるロドスの指揮を行う必要がなければ、

まもなく接続が切断されます。では、せつかくの皆さまのパーティのお邪魔をしたということであれば、謹んでお詫び申し上げます。>

アーミヤ

「待つて！切らないで」

手伝つて欲しいことがあります。

ドーベルマンさん、ドクターにはこれが必要です。」

ドーベルマン

「わかった、急げ。」

アーミヤ

「ドクター、このP R T Sも私たちの仲間です。次に何をしたら良いのか教えてくれるはずですよ。」

今は時間がありません。急ぎP R T Sでロドスの支援ネットワークに接続してみます。

そうすれば、これを利用して優位に指揮ができるはずですよ。声を出して指揮を取るのとは違いますから、



初めは慣れないかもしれませんが、上手く利用できれば救援作戦が順調に進むはずで  
す。

・私を信じてください。そしてドクターの思うがままに、ドクターが慣れている通り  
にやってみてください。

P R T S ・始めてください。」

P R T S ・

＜管理者としての権限認証が必要となります。識別方法を選択してください。＞

アーミヤ

「あの、ドクター……何か喋ってみてください」

「話す」

P R T S

＜なぜ黙ったまま画面の中央にタッチしたのかは理解できませんが……

—あなたの指紋の識別が完了致しました。

プロフィール確認、権限レベル：8

—おかえりなさい。D r. 希依那。＞

## オリジナル有

## アークナイツプロローグ〈オリジナル有〉

ああ、君か。

君にこうして会うのは久方ぶりだ。

ここ最近、君はずいぶん境界をさまよっていたようだな。

そして己が何者なのか、

君はもう忘れてしまっているのだろう。

しかし今は名前さえ思い出せば十分だ。

—さあ、ここに長く留まっては行けない。

君は元より私の客人ではない。

ここには存在してはならないのだ。

彼女には君が必要だ。

12月23日

この日が君にとって何を意味するのか、

今は思い出せないだろう。

しかしそのままでは、君自身を危うくしてしまう。

.....

だが――

君は思い出さねばならないのだ。

謎の声「意識レベル」。

謎の声「体外循環開始」心肺停止液の注入を完了。」

謎の声「体温低下」ヘキサメタゾン20ccを静脈に注射。」

謎の声「紺子を！」

謎の声「状態安定」切除を開始する」心室細動に注意」。

謎の声「ごめんなさい」。また苦しめることになってしまった。」

「。」

「ドクター！」

「手を。」

「私を。」

「私の手を握って!!」

――誰かの手の体温が伝わってくる……

ああ、なんて……心地がいいのだろう……。

だがそれと同時に込み上げてくる???

これは一体何なのだろうか……

「……」

「緊急……」

「救……!」

「……」

「……」

「……」

???????

「ドクター、ドクター!」

???

「さつき、さつきドクターは私の手を握ってくれたのに。」

???

「どうして目を覚ましてくれないんですか……どうしたら……」

医療オペレーター

「アーミヤさん! そんなに焦らないで、どうか冷静に!」

アーミヤ「あ……ごめんなさい……」

—暗転—

医療オペレーター

「もう！ドクターのことになると、まるで人が変わってしまふんですから。」

医療オペレーター

「でもアーミヤさん、ドクターがもしこのままなら……どうするつもりですか？」

アーミヤ

「……心の準備は出来ています。もしそうなったとしても決めたとおりにするだけです。」

医療オペレーター

「……わかりました。ではその通りに」

アーミヤ

「はい……よろしくおねがいします。」

アーミヤ

「じゃあドクター……。」

医療オペレーター

「でもひとまずは安心です容態は落ち着いていますから。」

医療オペレーター

「念のため、もう一度再検査してみます。お任せ下さい。」

アーミヤ

「はい。お願いします！」

医療オペレーター

「はい。呼吸はまだ微弱ですが、血圧は正常範囲内身体機能は問題ないはずです。あとは意識が戻るかどうか。」

アーミヤ

「」

医療オペレーター

「。あつ。目を覚ました？」

アーミヤさん、成功です、

ドクターが目覚めました！」

アーミヤ

「ドクター

「良かった本当に良かったドクター。」

医療オペレーター

「あつ！まだ動いちや。」

—ズキツ—

医療オペレーター

「安静にしてください。まだ体が安定した訳ではありません。」

アーミヤ

「ドクター」

ドクター

「……あつ。俺？と言うか……君、誰？」

アーミヤ

「えっ—ドクター—私は。」

「。」

「私はアーミヤといいます。」

あなたを助けに来ました。」

ドクター

「……へえー。うん。……じゃあそれは分かったとして……俺、記憶ないんだけど……俺の事なんか知ってるの？」

アーミヤ

「あなたは……。」

「私たちがロ・ドスの一員です。」

「私たちの仲間です。」

「Dr. 希依那。」

あなたは私にとって

一番大切な仲間なんです

思い、出せませんか？」

ドクター

「ん……悪いけどこれといって特に思い出せないわ……悪いね？」

アーミヤ

「……いえ……ドクターが悪いわけではありません。」

アーミヤ

「とにかく私にとってドクターは一番大切な人なんです。何かあっても、それだけは変わりません。だから、私に、少しだけ時間をください。少しだけでいいですから。」

ドクター

（なんだろう……このびよこびよこ動く耳自然と撫でたくなるようだ……。撫でてみても怒られないかな？……）



アーミヤ

「／／／あ、あの……………」

ドクター

「ん？あつ…。ご、ごめん……………」

アーミヤ

「い、いえ…その…ド、ドクターさえ良ければもつと触っていたいただいてもいいんですが……………」

ドクター

「ん？何？後半がよく聞こえなかったんだけど？」

医療オペレーター

「えつと…ドクターは、本当に…記憶喪失に？」

ドクター

「ん？ああ多分そうじゃないかな？…起きてからのことと自分の名前しか覚えてないや」

医療オペレーター

「そつ、そうですか…。えつと…アーミヤさん…どうしましょうか…」

アーミヤ

「……………」

医療オペレーター

「?ア、アーミヤさん?」

アーミヤ

「ハッ……………」

…………… 大丈夫です。

きつと時間が解決してくれます。」

ドクター

「で…………… ここは何処なの?」

アーミヤ

「あつ、はい ここは——」

ドンッ

アーミヤ

「えっ!?何が——」

ドクター（これまた凄そうな見た目した人が来たなあ……………）

完全武装の男

「アーミヤさん、マズイです!この施設内に侵入してきたヤツらがいます!」

完全武装の男

「しかも、あの装備は……ウルサスの兵士のものではありません！」  
バンッ

レユニオンメンバー

完全武装の男

「何をするつもりだ！」

ドンッ

完全武装の男

「敵襲です！アーミヤさん、敵は重火器を持っています。」

ヒュッ

ドクター

（えっ……クロス……ボウ？）

医療オペレーター

「うわわわっ！」

アーミヤ

「皆さん、気をつけて！壁の陰に隠れてドクターを守って！」

「……この装備はまさか

レユニオンムーブメント!? どうして

…… 前衛オペレーター。

戦闘の準備をしてください!」

前衛オペレーター

「了解!」

＼ドカーン／

前衛オペレーター

「クソツ、こいつらの狙いはドクターか!」

アーミヤ

「いえ」

ドクターの存在は誰も知らないはずですよ。

「急ぎケルシー先生に通信を!」

ドクター

(また知らない人の名前出てきたなあ……)

……ケル……シー? ……)

「グッ……」

アーミヤ

「ドクター!?やはりまだ体が痛みますか!?

医療オペレーター!!——」

医療オペレーター

「ハイ!!」

前衛オペレーター

「ダメです、通信機が正常に動作しません!」

アーミヤ

「どうやらジャミングされているようです。」

「まさか、ウルサス政府が私たちの動きに気づいたんでしょか?」

前衛オペレーター

「どうしますか?」

アーミヤ

「今回の作戦指揮はケルシー先生にお任せしています。でも通信できないとなると

.....

D.r. 希依那。

「私たちの指揮をお願いします!」

医療オペレーター

「そ、そんなの危険すぎます。まだ意識が戻ったばかりなのに。」

アーミヤ

「試してみたいんです。」

確かに記憶は失われています。でもドクターはかつて私たちと

私たちと一緒に戦った仲間なんですから！」

ー回想ー

???

「こんなに沢山のこと、私に教えていただいて、ありがとうございます。」

ー回想終了ー

アーミヤ

「。

一緒にたくさん。たくさんを経験したんです。私には分かります。ドク

ターならきつと勝利をもたらしてくれると。」

ー回想ー

???

「あなたならきつと勝利をもたらしてくれる。」

—回想終了—

アーミヤ

「突然こんなお願いをするのは、私もどうかと思います。でも、でも、お願いします。」

あなたの力を貸してください。

私もサポートしますから！」

ドクター

(…何故だろう…目覚めたら記憶も無かった筈なのに…この子の…アーミヤの為なら指揮を出来ると思えてくる…)

ドクター

「で、出来る範囲で頑張つて見るよ……。」

アーミヤ

「はい、私もドクターをまたこんな戦いに巻き込むのは不本意ですが、でも今の私たちには、Dr. 希依那の知恵が必要なんです。」

戦つていれば、指揮の感覚もきつと取り戻せると思います。

ドクター自身もまだ信じられないかもしれませんが、私は信じます。

きつとできるって、私は信じています。

ロドスの——指揮を！」

——オペレーション???

「黙っている。」

「アップルパイ!!」

ドクター

(なんでアップルパイ?)

アーミヤ

「レユニオンムーブメントは単なる無秩序な感染者集団だったので、  
でも今は、明確な意志の元に集団で行動している様に見えます。

では、次の敵を迎撃する準備を。」

.....

「切り捨てるっ!!」

「(、↓)(ノ、↓) ペシベシ」

アーミヤ「私が怖いですか？」

「雷鳴よ・轟け！」

「着いてきて！」



前衛オペレーター

「これで最後の一人だ！」

レユニオン構成員

「うわあ！」

前衛オペレーター

「目標は排除しました。」

敵小隊の撤退を確認！

Dr. 希依那の指揮は、アーミヤさんが言った通り素晴らしいものでした。」

アーミヤ

「はい、あっさり勝てましたね。」

ドクターが経験してきたものはこの程度ではありませんから。」

レユニオン構成員

「くっ・どうして・ウルサス人でもない連中が邪魔を

お前らなんかに

我々の仕事の邪魔はさせせん！」

???

「そこまでだ！」

ドクター

（また新しい人キター！）

前衛オペレーター

「ド、ドーベルマン教官！」

ドーベルマン

「何をボヤツとしている！もう少して蜂の巣になるところだったぞ！」

ドクター

（ええ…。ちよつと厳しい人なんだなあ…。）

前衛オペレーター

「も、申し訳ございません！」

ドーベルマン

「急げ！隊列を立て直すぞ！」

前衛オペレーター

「はっ！」

アーミヤ

「ドーベルマンさん！来てくれたんですね！」

ドーベルマン

「アーミヤ、緊急事態だ。私の小隊もレユニオンからの攻撃を受けた。

そちらも同様だろうと推察し、急行してきたというわけだ。」

アーミヤ

「レユニオンは、どうして私たちを襲撃したのでしょうか。」

ドーベルマン

「感染者のための組織・盲目的な思想を持つ危険な集団だとは思っていたが――

――まさか武力蜂起するとはな。しかもウルサスの都市を選ぶなど正気とは思えん。

この状況は、さらなる混乱を招くことになるだろう。

アーミヤこれ以上巻き込まれる前に、すぐにチエルノボークを離れるぞ。」

アーミヤ

「わかりました。ドクターの救出にも成功しましたし、計画通り撤退しましょう。」

ドーベルマン

「この方が・D r. 希依那か？」

ドクター

「ああ――」

アーミヤ

「はい、そうです。」

ドーベルマン

「Dr. 希依那、この私のことは知らないかもしれませんが、アーミヤのことはわかるだろう。安全のために——」

アーミヤ

「あ、あの。」

ドーベルマンさん、今のドクターは状況が芳しくなくて。

簡単に言うと、ドクターは記憶喪失なんです。」

ドーベルマン

「なに？記憶喪失だと？」

・困ったな。そんな状況で指揮権をドクターに委ねようとしているのか。」

ドクター

(…この人…厳しいというか…常識人なだけ?)

アーミヤ

「ドクターは指揮官としての能力は失っていません。

少なくとも、先程の戦いでそれは確認できました。」

ドーベルマン

「わかった。私は簡単にこの眼で見えないものは信じることはできんが  
アーミヤ、お前を信じよう。」

ドクター

(ええ…納得しちゃうの…?)

アーミヤ

「ありがとうございます。」

ドーベルマン

「Dr. 希依那、私は行動隊E1の隊長、ドーベルマンだ。」

お前をこのウルサスの都市―チェルノボーグから我々のロドスまで送り届けてやる。」

ドクター

「ああ、よろしく頼む。」

ドーベルマン

「ああ。…本題に入ろう。」

ここはチェルノボーグの中核エリアに位置している。西側から即時撤退するのが得策だろう。」

アーミヤ

「ですが、当初のプランでは、西の合流地点に私とドーベルマンさんの部隊がいちど集結し、撤退信号を出して待つ。」

「そういう計画になっていました。」

ドーベルマン

「計画通りに事が運べば良かったのだから。」

とはいえ、Dr. 希依那をあの手元ノボーグの棺桶から救出するのは今日が最後のチャンスだったからな。仕方なからう。

だが、嫌な予感がするな。」

ドクター

(棺桶……?)

医療オペレーター

「ア、アーミヤさん！」

アーミヤ

「どうしましたか？」

医療オペレーター

「ロドスから通信が入りました！」

アーミヤ

「つながったんですね！まさか、ケルシー先。」

「???<誠に残念ながら、違います。>

アーミヤ

「P.R.T.S.」

P.R.T.S.

「<アーミヤ様、ご報告いたします。ニューラルコネクタへの緊急接続要請が予期せぬ形で実行されました。」

「現在、ロドスも通信妨害を受けており、接続が可能なのはニューラルコネクタのみとなっております。」

「そのため、電波を使用した通信では、まだロドスに帰還していないケルシー様にコネクトすることはできません。」

「何れともあれ、アーミヤ様の安全が確認できましたので、現時点での私のミッションは完了となります。」

ドーベルマン

「いっ。」

「こんな時に脳天気なことを。」

PRTS

<ニユールルコネクタによるロドスの指揮を行う必要がなければ、まもなく接続が切断されます。では、せっかくの皆さまのパーティのお邪魔をしたということであれば、謹んでお詫び申し上げます。>

アーミヤ

「待つて！切らないで」

手伝つて欲しいことがあります。

ドーベルマンさん、ドクターにはこれが必要です。」

ドーベルマン

「わかった、急げ。」

アーミヤ

「ドクター、このPRTSも私たちの仲間です。次に何をしたら良いのか教えてくれるはずですよ。」

今は時間がありません。急ぎPRTSでロドスの支援ネットワークに接続してみます。

そうすれば、これを利用して優位に指揮ができるはずですよ。声を出して指揮を取るのとは違いますから、



初めは慣れないかもしれませんが、上手く利用できれば救援作戦が順調に進むはず  
 す。

・私を信じてください。そしてドクターの思うがままに、ドクターが慣れている通  
 りにやってみてください。

P R T S ・始めてください。」

P R T S ・

＜管理者としての権限認証が必要となります。識別方法を選択してください。＞

アーミヤ

「あの、ドクター。何か喋ってみてください」

ドクター

「んー？！うー？！」

P R T S

＜なぜ画面の中央にタッチしたのかは理解できませんが

—あなたの指紋の識別が完了致しました。

プロフィール確認、権限レベル：8

—おかえりなさい。D r ・希依那。＞

## 誰ガ為ニ舟ハ往ク

……困った事になった。

現在私——Dr. ことライム——はロドスアイランドの

管制室にて航路の指示をしていたところ、

航路上にあつた天災に巻き込まれ、

テラの大地においてイベリアの…

特にアビサルハンターたちが近づかない方が

良いと口を揃えて行つた

☒海☒

にいたのだ。

理論は分らない。

航路の状態。

ロドスの加速度。

天災の移動速度いずれをとつても問題はなかつた。

それに炉がオーバーヒートを起こしたとの報告も

なかったし、

パイプラインに対しても必要エネルギーの

供給は果たせていた……

が…

事実として起こってしまったのなら

対処せねばならない。

まずは周囲の確認から始めよう。

(…ん?…なんだあの塔は…いや?風車か?)

「…ん?…う…ん…あ…れ?…ここは?…」

(ん?もしかしてオペレーター達は気絶していたのか?)

いかな…状況に思考が追いついていないせいかオペレーター達の安全確認を忘

れていた…)

「怪我はないか?—アーミヤ」

「ドクター…私は大丈夫です…それよりここは何処なんですか?他の方は大丈夫な

んですか!」

「OKアーミヤまずは…落ち着こう」

数刻後

「……すみませんドクター、少し……冷静さが足りていませんでした……」  
 そう言つてコータスの特徴的な耳をしんなりとさせている。

(ここは平時以上にしつかりしないと……)

困つた時のケルシーへの内線である。

《——ジジツ——》

……なんだドクター…… もしや

今現在ロドス本艦艦外に見えている謎の都市に関しては

私ですら知りえない

だが

推論を立てること自体は可能だ。

ASH達が我々の世界に来たように、

我々も彼らと同じように別の世界へと来てしまった可能性は

あるのだが彼らと同じ世界に来たという可能性は低い、

彼らの話を聞いた限りでは彼らの世界は鉄と硝煙の香りの方が多かったそうだが今

我々の目の前にあるこの都市の空気は澄んでいるし

この街の風は我々の世界ですら得られないような何かを秘めている可能性があ

る。

また、この世界に舟ごと来てしまった原因に

関しても未だ不明だ、

よつて艦船ごと来てしまったのも原因のひとつとして考えても良いだろう、

だが現状必要なのは言わなくてもわかるな?」

「情報だろ?」

《その通りだ、そして何が起こるかわからない以上現地で指揮を執ってもらおう。

少数のオペレーターと共に現地へと向かい情報を集めてくれ。それと… 人選は君に任せるがくれぐれも血の気が多いオペレーターには気を払ってくれ…。》

「了解」

ケルシーですら知りえないことか… やはり天災は侮れないな…

オペレーターの人選を終えた後

(イフリータが同行したいと喚いたり。

その結果案の定炎が発生からの大事そうにアイスを頬張っていたスルトのアイスが温度上昇によつて溶け乱闘騒ぎになりかけた)

早速街に上陸するため人気のなさそうな位置をドローンで搜索した。幸いなことに

人気がない港があったのでそこに停泊することにした。

そして、この街のなまえは☒風都☒というらしい。

(ドローンでの搜索中何度か標識を見かけることがあったのだが言語は共通のようだ)

停泊し同行するメンバーこと

クーリエ

ヴィグナ

(??権限レベルが足りませんか?)

(??権限レベルが足りませんか?)

ジエシカ

と共に廃れた港の倉庫を探索することにした。

(停泊したところは囲いと屋根のある大きめの倉庫だった

ので暫くは騒ぎにはならないだろう)

するとふと男の声が聞こえてきた。

(ファーストコンタクトの相手がどんな人物か気になるところだ…)

「…は持つてきた… 例のブツを」

「確かに… じゃあ取引成立だ…」

(早速裏取引の現場か…)

(ドクター、どうしますか…)

クーリエが指示を仰ぐ。

この場でわざわざ交戦する意味は無いが…。

ここが犯罪の温床になられるのも面倒だな…。

(この現場に人が寄り付かなくなれば舟を隠しておくことが出来る。

幸いなことに相手は2人こちらは5人だそれに彼らは武装をしている可能性はほぼない。各個撃破であたれ)

(分かりました)

(了解)

????????????

「——裏取引か… 十中八九ガイアメモリだろうな。」

《ああ、こちらは公には動けないからな… そちらに任せたい。》

「わかつたすぐ向かう」

《場所は——》

ロドスアイランド〜某所〜

「——…ふむ…座標としては今まで介入した世界のものだが…

この世界の技術水準あるいは僕の世界の技術を用いたとしても、このようなものは作

ることが出来ないだろう…

これほどの技術がありながらこのデータベースにあるのは主動力や医学、薬学に関するものが多いな…

——彼らも対抗策なり得るのか？——

なる可能性があるのなら彼らに託してみても良いのだろう。だが人としてのスケールが僕らとはまた異なっているな…このD r. という人物しか今のこれを使いこなすことは出来ないが…データベースにある彼が記憶喪失であること、彼が仲間と信頼関係を築いているということを考慮すればこれを十分に使いこなせるだろう別世界に奴の手が及ぶことがないようにことが進むことを祈るばかりだが…」

そうまとめると風でも鉱石でもない来訪者はデータベースに自らのUSBを挿し何かの図面と小型の瓶の設計図を送り込んだ。

「君が☒仮面ライダー☒となることを願っているよ」

図らずして生まれたロドスと風都の出会いは今始まりを迎えた。しかしして未だ観ぬ街へと確かに歩みを進めて行つた。

その裏で独りの科学者とその介入を知らないD r. の会合は  
終わつた。



だがそれが何を意味するかは今のD r. は知りえない。